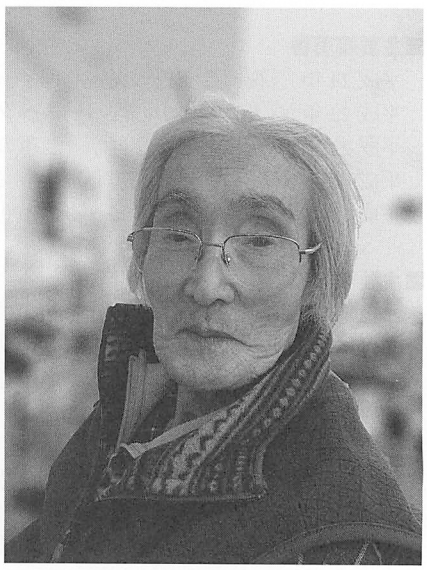
Japanese Journal of Applied Psychology
2015, Vol. 40, No. 3, 230–231

追　悼

中村昭之先生を偲んで

小野浩一（駒澤大学）

中村昭之（なかむらしょうじ）先生が2014年12月28日にお亡くなりになりました。享年87歳でした。



（中村昭之先生近影　ご遺族より）

中村先生は1927年（昭和2年）12月に福岡市にお生まれになり，九州大学文学部哲学科心理学専攻を1953年に卒業後，長崎県立短期大学，長崎県立国際経済大学の教員を歴任された後，1970年（昭和45年）4月に駒澤大学に赴任なさいました。その当時，駒澤大学では1968年4月に，九州大学から秋重義治先生が移られて大学院心理学専攻修士課程が開設され，その翌年に文学部社会学科の中に心理学コースが開設されたばかりで，中村先生は1970年の大学院博士後期課程の開設に合わせての着任でした。中村先生が駒澤大学においでになった1970年度の心理学の教員は，秋重先生のほか，松本博基，佐久間鼎，小笠原慈瑛，山岡哲雄の各先生方でした。

その後，秋重先生はじめ何人かの先生が他界され，また，他大学に異動になった先生もあり，スタッフは大幅に交替いたしましたが，中村先生はご定年になる1998年まで28年の長きにわたって駒澤大学における心理学の研究教育を先頭に立って推し進めてくださいました。私どもの念願であった心理学科の設立についてもまさに身を粉にしてご尽力くださり，心理学科に初めての入学生が入学する年の3月にご退職になったのも中村先生らしい巡り会わせであったと思います。

中村先生の研究領域は大きく括ると臨床心理学になりますが，社会，人格などを包含する広い分野において数多くの業績を残されています。東洋的行法の研究においては第一人者としてご活躍なさいました。また，教育者としても中村先生は多くの優れた人材を世に送り出されました。駒澤大学の心理学スタッフはいまでは約半数が臨床心理学を専門としておりますが，中村先生がご在任中は臨床を専門とする教員は中村先生お一人でした。したがって，学部生だけでなく，臨床を希望する大学院生はほとんどが中村先生のご指導を受け，その修了生たちがいま，日本各地の臨床現場で活躍しております。

日本応用心理学会と中村先生との繋がりも浅からぬものがあります。1974年に運営委員になられ，1978年から1995年まで常任運営委員，1996年副会長，そして1997年には会長として日本応用心理学会第64回大会を開催しております。さらに1988年から1993年の5年間は中村先生を事務局長として駒澤大学心理学研究室が学会事務局を引き受けておりました。中村先生は，民主的で開放的な方でしたので，皆で一緒にやろうということで，篠原英寿先生（故人），谷口泰富先生，それと私が幹事として会議などに参加させていただきました。お陰様で，学界を代表する著名な先生方の人となりに接することができ，とても貴重な経験をさせていただきました。

日本応用心理学会には以前から「公開シンポジウム」という応心らしい事業がありますが，中村先生は「明るい中高年をめざして」（大村政男先生と共同企画），「宗教と癒し」などを企画し，多くの参加者があって時

宜を得たとても面白い会であったことを思い出します。日本応用心理学会のほかに先生は日本心理学会理事，日本心理学会モノグラフ編集委員なども務め，学会に貢献なさいました。

定年退職なさってからも，先生は学科で催す研究会や，各種会合，教員の懇親会などにお顔を見せてくださり，私たちが抱えている問題について的確なご意見を示してくださいました。先生の口癖は「いかんたいね」でした。博多弁で「しないといけないね」のような意味のようですが，私には「それはいけないことだね」のようにも聞こえていました。白髪交じりの長髪で，哲学者のようでもあり，求道者のようでもあり，また，高齢になったヒッピーのようでもありましたが，折に触れて先生が発する「いかんたいね」の言葉に私たちは立ち止まり，身を引き締めたことを覚えています。余談になりますが，私の2人の子供が小さかった時に，大学で中村先生にしばらく遊んでもらったことがありました。帰宅してから2人が「それは，いかんたいね」と話しながらおもちゃで遊んでいるのを見て，そのインパクトの強さを実感したものでした。

先生はご定年後しばらくして咽頭を手術なさり声が出にくい状態になりましたが，それでもときどきお見えになったときには楽しいお話をしてくださいました。先生のご恩に衷心より感謝申し上げるとともに，ご冥福をお祈り申し上げます。

■主要業績

・自己治療的心理療法の研究 (1) 坐禅の心理療法的側面，特に動機と心的態度の変化について　経済と文化，**7**, 2–9, 1964.

・自己治療的心理療法の研究 (2) 坐禅の心理・生理学的研究　経済と文化，**8**, 13–29, 1966.

・叢林生活と森田療法における生活の類似性に関する研究：人間関係と体得過程を中心として　精神療法研究，**5**(2), 45–52, 1974.

・叢林生活に関する心理学的研究　学位論文　駒澤大学，1977.

・イメージ療法に伴う生理・心理学的研究　催眠医学研究，**25**(2), 21–26, 1981.

・家族と家族療法（共訳　Minuchin, S. Family and Family Therapy: Harvard University Press）誠信書房，1983.

・抑うつの認知行動療法（監訳 Williams, J. M. G. The Psychological Treatment of Depression: Groom Helm）誠信書房，1985.

・禅的瞑想によるセルフ・コントロール　催眠学研究，**36**(1), 40–43, 1991.

・日本における東洋的行法の研究展望　心理学評論，**35**(1), 22–43, 1992.

・Zen Practice and Self-Control. Journal of the Faculty of Letters Komazawa University, **53**, 117–130, 1995.

（2015年2月7日記）